

# 理事長の役割、学長の役割

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

民間病院長の年中行事であるが、今春も医学部教授の就任パーティに出席した。それは都内の名門私学で小さな単科大学である。

そこで理事長、学長、学部長の順番で続く主賓挨拶から、ついつい日本大学のニュースを連想し、それぞれの職責が異なることを、あらためて認識した。

連日、長時間を割いて報道がなされる日大アメリカンフットボール部の悪質タックル問題。それは名門チーム同士の対戦とは言え、プロフエツシヨナルスポーツではなく大学運動部の非公式試合での問題発生である。

その際の監督、コーチの動きまでもキャッチした映像が繰り返し流れ、真意が問われ、スポーツそのものや大学教育の在り方、ついには日本大学全体のガバナンスまでもが追及され、大変な社会問題にまで発展している。

確かに、そのラフプレーは、ルールが分からない人間から見ても明らかに反則行為である。そこで早々に、顔出し、実名で謝罪会見に挑み、300人余りの報道陣を前に、監督やコーチを決して中傷することなく、自らの過ちを真摯に認め、被害者に謝罪する日大生・宮川泰介君の度胸や、当意即妙な質疑応答が注目を集め、即座に彼は時代のヒーローに、その後の監督・コーチ会見で大人が悪者となった。

しかしながら、それらの報道に、国民があまりにもエモーショナルに成り過ぎてはいないであろうか。

額面的に捉えれば、指示を下したであろう指導者は失格だが、今回の件はコンタクトスポーツの激しさを十分に熟知し、フットボールでの無防備な相手に対するタックルの危険性を認識していた全日本選抜プレイヤーの故意行為でもある。幸いには大事に至らなかつたが、仮に関西学院大学生が、選手として再起不能に陥る、あるいは、それ以上の重篤な後遺症が残るような事態になれば、彼への社会的評価も大きく変わったことであろう。

そして関学大監督が容赦なく憤慨したこと、被害選手の父親が論客であったこと、日大側の反応が後手に回ったこと、広報担当者の迷司会ぶりなどが今回の報道をヒートアップさせたわけだが、司法が介入する前の時点で、選手と指導者、どちらが真犯人かという文言は、あまりに拙速に思う。

さらには自分にはフットボールを続ける資格は無いと言う（この言葉に一番重みを感じたが）宮川選手に現場復帰を促す動きには偽善感を持つ。

そこで小生、現在まで日大に対して特別な優越感も劣等感を抱いたこともないし、監督、コーチ、選手どちらの肩を持つ気もないが、高学歴社会になつた我が国においても、大学に進学できずに働いている人、奨学金返済のためアルバイトに追われ、クラブ活動どころではない20歳が多く存在しているのが実際である。そのなか、垢抜けた大学スポーツの代表格であるアメリカンフットボールに没頭出来る学生や、

その指導を生業に出来る大人は実に恵まれた人々であり、国民皆の関心事であるかは疑問だ。

そして日大の危機管理が非難されているが、今回の一件、内田監督に問われているのは、スポーツ指導者としての資質であり、経営陣である常務理事としての責任

ではない、あくまでも運動部は学生の課外活動であり、謝罪すべきは教員トップである学長であり理事長の責務ではないなどと、何故に言い切れないのである

うかとも思うが、ひねくり過ぎであるうか？

それにしても鈴木大地スポーツ庁長官は大変だ。相撲だ、レスリングだ、アメフトだと、騒動が絶えない。

## Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。東京女子医大、筑波大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。伊藤病院 <http://www.ito-hospital.jp/> 名古屋甲状腺診療所（名古屋分院） <http://www.kojin-kai.jp/nagoya/> さっぽろ甲状腺診療所（札幌分院） <http://www.kojin-kai.jp/sapporo/>

